

就学前の俳句指導

— 三尺の童に俳句をさせることは可能か —

Preschool Haiku Instruction

— Is It Possible for Preschoolers Called Sanseki No Warabe by Matsuo Basho to Write Haiku? —

西田 拓郎 NISHIDA Takuro

(教育学部)

1. はじめに

俳聖・松尾芭蕉¹⁾は「俳諧は三尺の童にさせよ。初心の句こそ頼もしけれ」(三冊子)²⁾と言ったという。身長が三尺と言うのならば1mにも満たないことになる。それならばまだ言葉もままならぬ幼児であろう。この場合の尺とはどうも年齢の単位で、三尺は7～8歳を指すのだとも考えられる。すると小学校1年～2年ぐらいだろう。

さて、多くの学校で俳句を扱うのは小学校3年からである³⁾。小学校国語教科書にも3年生から季節を表す言葉や俳句が掲載され始める。ちなみに、多くの子供たちが教科書で最初に出会う俳句は「古池や蛙飛び込む水の音 (松尾芭蕉)」である。

ということは、芭蕉は現在の学校で俳句を教えるよりも、もっと早いうちから俳諧(俳句)をさせなさいと言っていることになる。しかし、三尺の童に俳句をさせることは本当に可能なのだろうか。現在行われている就学前の俳句教育活動はどのように行われているのか、また、それはどのような成果をあげているのか、さらにはどんな課題があるのかを調査し検証してみることにする。

ネット上のホームページ⁴⁾(以下、HP)を検索すると、保育に俳句活動を取り入れている幼稚園、保育園はかなりの数ある。本稿では、長年にわたり俳句活動を行っている岐阜県岐阜市にある芥見第二幼稚園⁵⁾(以下、本園)を取り上げる。

資料1 芥見第二幼稚園ホームページ

学校法人 芥見学園
芥見第二幼稚園
 あくでみせいにようちえん
 〒501-3107 岐阜市加賀9-1-7
 TEL 058-243-5761 FAX 058-213-5735

▶ 新着情報
 ▶ 園長ご挨拶
 ▶ 楽しい園生活
 ▶ 幼稚園の様子
 ▶ 子育て支援
 ▶ 今月の俳句
 ▶ 園だより
 ▶ アクセスマップ
 ▶ 未就園児教室
 ▶ よくある質問
 ▶ 資料請求
 ▶ 入園のご案内

◎ 今月の俳句 ◎

日本の心と自然の美しさを味わおう
 俳句の特徴に、季節・季語とよばれる季節の言葉が入り、日本固有の文化・情緒・自然を表現する大きな役割をしています。季節は、自然と人々の生活との溶け合いのなかから生まれてきたもので、子どもたちが季節に親しめば親しむほど、日常は自然のなかにより深く入っていきます。

毎月ごとに俳句を一句選び、今月の俳句として紹介します。毎朝、クラスみんなで音読して、身近な自然を詠んだ俳句に親しみ、自然と人のかかわりを大切にする心を育みます。

今年も、小林一茶おじさんの俳句を通し、改めて日本の自然の美しさや、けなげに生きている身近な生き物たちへ寄せる思いに触れてみましょう。幼い目と耳とこころで、そんな日本のよさに気づいていけたらと願っています。

2. 芥見第二幼稚園の経営と俳句

(1) 俳句活動の理念

本園の俳句活動の様子の一部はHP上に見ることができる。前頁の(資料1)に示したのは本園のHPである。

「今月の俳句」のコーナーがあり、俳句活動が園経営に位置づいていることが分かる。杉山光子先生(本園園長)の主宰のもと、同じ系列の芥見幼稚園とともに、両園共通の経営方針として平成19年(2007)から始めてから16年になる。ある特定の時期に行事や特別活動として行うのではなく、長年にわたり常時活動として俳句活動を行っているのである。本稿では、本園の実践を取り上げ、俳句活動の具体的な様子とその成果や課題を明らかにしたい。

本園の俳句活動の理念はHPの記載に見ることができる。そこには次のように記されている。

日本の心と自然の美しさを味わおう

俳句の特徴に、季語・季題とよばれる季節の言葉が入り、日本固有の文化・情緒・自然を表現する大きな役割をしています。季語は、自然と人々の生活との溶け合いのなかから生まれてきたもので、子どもたちが季語に親しめば親しむほど、日常は自然のなかにより深く入っていきます。

この記述から、俳句の特徴は季語であり、子供が季語に親しめば子供の日常は自然の中により深く入っていくという考えのもとに俳句活動を進めようとしていることが分かる。岐阜市内にありながらも山の中腹にある本園は自然豊かな環境に恵まれている。それを生かしてのことでもあろう。

もっとも、幼稚園教育において自然は重要な位置にあることは言うまでもない。くしくも「幼稚園教育要領」⁶⁾の第2章ねらい及び内容には、「自然」という言葉が13回も出てくる。その中でも領域「環境」には次のとおり記されている。

1 ねらい

(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。

2 内容

(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。

(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。

(4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。(傍線は筆者)

この記述からもわかるように、自然の中で子供をはぐぐむことの重要性を受け止めてい

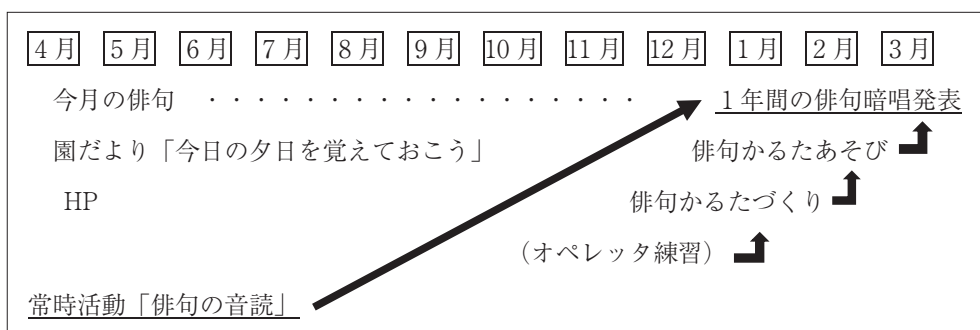
るのは、どの幼稚園でも同様のことであろう。

とりわけ、本園では、このような幼稚園教育のねらいをよりよく達成するための創意工夫として俳句活動を行っているのだと言える。その具体は、子供の園生活に俳句の季語を介在させることにある。それによって、子供をより深く自然の中に導こうとしているのである。

(2) 俳句活動の年間計画

本園の1年間の俳句活動の流れは下記の(図1)に示すとおりである。

図1 1年間の俳句活動の流れ



全児童の常時活動としては「俳句の音読」がある。毎朝が俳句の音読から始まる。どの教室にも前面に「今月の俳句」が掲示されている。それを先生の合図で全園の子供と先生が一斉に音読する。そのあと、先生がこの俳句と関係づけて園での活動や自然・日常生活についてのお話をする。みんな静かに興味深く聞いている。だから、月末にもなるとどの子にも俳句の意味が分かるようになる。毎月の俳句は毎月発行される「園だより」(A5判冊子12頁)冒頭に園長先生の解説とともに載せられている。同様の記述がHPにも掲載されるので家庭やその他一般の方々にも広く周知されている。

一年間の取り組みの出口として、年長児は、2月の発表会「ひなまつりお楽しみ会」で、保護者等の前で1年間の俳句を暗唱発表する。毎月の俳句を元気よく音読するのである。園児は、ただ紙を見て俳句を読んでいるのではなく、12句の全てを暗唱している。先生も隣で一緒になって、笑顔で暗唱発表する。

発表会では、年齢別の各組が取組んできた劇あそび「オベレッタ」の発表もあるが、このオベレッタに取り組む過程で、その内容を基にした「俳句かるたづくり」や作ったかるたで遊ぶ「俳句かるたあそび」も俳句にかかわる活動として年間計画に位置づけられている。その具体的な実践の様子は次のとおりである。

3. 芥見第二幼稚園の俳句活動実践

(1) 毎朝の俳句音読

本園では、全園そろって朝の会を行う。それは「今月の俳句」にかかわる内容から始まる。まずは、放送で担当の先生（日直）による俳句にかかわる話がある。次に担当の先生の合図で、本園の全園児および全職員が大きな声ではっきりと俳句の音読をする。長年、日常活動として取り組んでいるだけあって、よくとおる元気な声がそろろう。リズムに乗っていて楽しそうだ。そのあと、各教室では担任の先生の話に続く。俳句の内容から当日の園生活につながる話である。この朝の会を終えると各教室がそれぞれの活動に入っていく。これが、本園の毎日の朝のルーティーンである。園児は、一年を通して継続的に俳句に触れていることになる。



写真1 朝の会で俳句の音読をする園児

令和4年7月の俳句は、

うつくしや障子の穴の天の川 小林一茶

であった。俳句は日本の四季の美しさや生き物の健気さが詠まれている小林一茶の句から選ばれる。中でも、リズムよく音読できる句、オノマトペや擬音を楽しむことができる句が選ばれる。さらに、内容が現代につながっていて、幼い子供にもイメージしやすい自然や生活、伝統的な文化が詠まれている句を選びすぎる。

令和3年度に取り上げられた俳句は、次のとおりである。

- 4月 西へ散る桜や弥陀の本願寺
- 5月 竹の子やともども育つすずめのこ
- 6月 つくづくと牡丹のうえの蛙かな
- 7月 呼ぶ声を張り合いにとぶ螢かな
- 8月 そよかぜは蝉の声より起こるかな
- 9月 秋風やむしりたがりし赤い花
- 10月 くれいそげくれいそげやと赤とんぼ
- 11月 馬の子が口さしだすや柿もみじ
- 12月 越えて来た山の木枯らし聞く夜かな
- 1月 風の尾をくわえて引くや鬼瓦
- 2月 野ほとけのお鼻の先のつららかな
- 3月 大鶴の大事に歩くすみれかな

（傍線部は季語、筆者）

どの月の俳句の中にも、その月にふさわしい季語が詠み込まれている。「桜」や「蛙」「蝉」「赤とんぼ」などは、園児の身近な環境で見ることができる季語である。園児は、普段の生活と自然にかかわらせながら、俳句に親しむ。その一方で、「柿もみじ」や「木枯

らし」など、園児にはまだ聞いたことのないような季語も中にはある。それらは、言葉の意味や様子を先生から教えてもらったり、暗唱したりしながら、生活や環境の中で自然に覚えていく。また、「凧」という季語は、園での「凧あげ」の体験をしながら、次第に意識する言葉となっていく。

毎年、年長児は、年度末の「ひなまつり会」でステージに立ち、暗唱した1年間の俳句をすべて一斉音読で発表する。観客は大喝采を送る。これを見ると、教員は自慢できる園の特色として今後も継続・発展させていきたいという思いになると言う。

(2) 「今月の俳句」の選出と園だよりによる広報

説明の順序が逆になるが、毎朝音読する「今月の俳句」は前月末までに園長が選出し、毎月発行の園だより「きょうのゆうひをおぼえておこう」（A5判24ページ）で保護者や教員に周知する。右掲の（写真2）はその2022年7月号の表紙である。園長は、平成19年（2007）より、この園だよりの冒頭に俳句の紹介をしている。その月の季節にあった俳句を小林一茶⁷⁾の俳句集から選ぶ。小林一茶の俳句を選んだ願いは、次の2点である。



写真2 園だより「きょうの夕日をおぼえておこう」

- i 身近な日本の四季の美しさ・生き物の健気さに共感できるようにしたい。
- ii 言葉のリズムを楽しみ、語彙を豊かにし、言葉の正解を広げることができるようにしたい。

この2つの願いを実現させるために、次の5つの観点から、俳句を選んでいる。

- i 現代の生活に違和感のない身近な題材をテーマとし、子供たちが共感できる俳句。
- ii 子供たちがイメージしやすい身近な自然（天候・生き物・植物）が詠まれている俳句。
- iii 現代の生活にもつながるような、伝統的な行事を詠んだ俳句。
- iv リズムよく音読しやすい俳句。
- v オノマトペ・擬音を楽しむことができる俳句。

このようにして選出した俳句に解説や紹介の文章を添えて園長が園だよりに記載している。次に示す資料2は令和4年7月発行の内容である。

資料2 園だより「きょうの夕日をおぼえておこう」令和4年7月号より

「うつくしや 障子の穴の 天の川」 一茶

梅雨明けを前に、プールあそびや水あそび・泥んこあそびを楽しみ、夏の暑さにすっかり慣れた子ども達。そんな梅雨の晴れ間の夜、両手を双眼鏡のように目に当て空を見上げてみると……。東の空に北から中天を通り南の地平線にかけ、ほの白い雲

のような集まり「天の川」がくっきりと。七夕の織姫星（こと座のベガ）・彦星（わし座のアルタイル）が「天の川」をはさんでみられ、白鳥座のデネブとともに夏の大きな三角形が見つかります。現代では、障子からのぞく機会はないかもしれませんが、無限の宇宙へのゆめが広がる夏の夜空が美しく、七夕のお話やまつわる星を探し、梅雨明けを待ち遠しく思う7月です。

この文章では、選出した一茶の俳句を現在の園児の生活や環境とのかかわりから解説している。本号では季語である天体「天の川」の様子や七夕伝説を紹介しながら、その季語「天の川」への興味付けや現在の生活とのかかわりを実感させている。

園長が書いたこの文章を踏まえて、その日の放送当番になった先生が、その俳句に関係づけながら本日の話をする。令和4年7月5日(火)には、放送で次のような話があった。「こじか組（年長組）」⁸⁾の園児の反応を交えながら紹介する。

7月になって新しい俳句になりました。七夕が近づいてきてお空を見上げると、「あまのがわ」というのが見えます。「障子の穴」というのは、おじいちゃん、おばあちゃんの家にあるかな。今度また見てみてください。障子の穴から見える景色はいつもと違うかなと思います。夜に障子の穴から見上げると、お星様がいっぱい見えるかなと思います。今日は、雨が降って残念ですけど、みんな晴れになったら、見てみてください。

（園児「はあーい。」）

それでは、今月の俳句をみんなでよんでみましょう。

今月の俳句

（園児「うつくしや しょうじのあなの あまのがわ」）

放送担当の先生は、自分なりにこの俳句を解釈し、鑑賞し、幼児が様子を想像できるように、分かりやすい言葉で補足している。この俳句の中に出てくる「障子」は今やほとんどの園児が知らないであろう。それを「おじいちゃん、おばあちゃんの家」を連想させて親近感をわかせることを通して補足している。

これを受けて、各教室では担任の先生が園児に情景がイメージできるような話をしているという。アンケート調査⁹⁾によると「かたつむりそろそろのぼれ富士の山」という俳句の紹介では、「富士山」について想像させたり、実際に「富士山」の写真を見せたりしているという。また、園だよりはすでに各家庭に届いているため、保護者の協力や配慮も得ながら園児は「障子」をイメージしていくであろうことが予測できる。

(3) 園での日常生活

園での日常生活は「今月の俳句」に従属するものではない。しかし、各先生は俳句と関

連付けながら園児の生活を見守っているようである。本園の先生に「音読している俳句を生かしてどんな指導を行ったか」をアンケート調査⁹⁾したところ、次のような回答があった。

- ・ 季節の昆虫などを見つけたときに、「俳句の〇〇だね。」などと声をかけた。
- ・ 俳句に出てくる生き物（つばめ・かたつむり……）を実際の生活で見かけると、園児に声をかけた。
- ・ 俳句に出てきた「かたつむり」や「さくら」等と言った言葉を生かして、保育の導入展開に繋いだ。
- ・ 春夏秋冬、それぞれの季節の移り変わりを感じ、自然あそびにいかすことができた。
- ・ 年長児オペレッタの台詞を覚えて言うときに、「ひと言、ひと言、俳句のように区切りをつけて丁寧に。」と伝えた。
- ・ 俳句の言葉を変えて、生活の中で言葉あそびをした。「〇組さん、そのけそのけ先生とおる」などと言ってあそんだ。

これらのアンケート結果をもとにして考えると、本園の先生方は、俳句の音読を次のような点から保育に生かすように工夫しているということが言える。

- ア 園児が言葉を通して自然や環境に興味関心をもつことができるようにしている。
- イ 俳句の言葉を園児の具体的な体験につないでいる。
- ウ 俳句の言葉を使って、園児の声かけに生かしている。
- エ 俳句の言葉を園児で活動の導入に生かしている。
- オ 俳句の言葉を他の活動に生かしている。
- カ 俳句のリズムに親しませている。

このように、「今月の俳句」の中にある季語に時折触れながら、あるいは俳句のリズムに親しみながら園での生活や活動が展開されていく。

(4) 俳句かるた遊び

本園では、2月の「ひなまつり会」に保護者にオペレッタの発表をしている。右掲の(写真3)がそれである。年末から練習に取りかかるが、そのオペレッタの内容をもとに「オペレッタジャンボかるた」(俳句かるた)を作り、それを使って遊ぶ次のような活動を行っている。



写真3 「ひなまつり会」

- I あそび お正月あそび「オペレッタジャンボかるた」
- II ねらい
 - ・オペレッタのお話に親しみ、言葉・文字への関心を深める。
 - ・ルールを守り、自分達で役割を分担しながらあそびを進める楽しさを味わう。
- III 活動の流れ
 - i オペレッタの話に親しむ。
 - ii オペレッタの話から575のリズムで読み札の言葉をつくる。
 - iii 読み札にふさわしい絵札を描く。
 - iv できあがったかるたで遊ぶ

1月の保護者参観「お正月あそび」では、園児が自分たちでつくったかるたで遊ぶ様子を保護者が参観する。読み札の文言は、オペレッタのお話について、園児が発した言葉を先生がうまく取り上げて、575の言葉のリズムに整える。

令和2年度に行ったオペレッタ「ピーターパン」の話の内容をもとに、園児（年長児：こじか1組）がつくったかるたの読み札は次のとおりである。

- | 「オペレッタジャンボかるた」(ピーターパン) | こじか1組 |
|------------------------|------------------------|
| ㊀ | そぼうよ こどものままで いたいんだ |
| ㊁ | いわやまで ふくとたたかう ぴーたーばん |
| ㊂ | うえんでいーは いちばんおおきい おねえさん |
| ㊃ | えいえいおー わるいかいぞく やっつけろ |
| ㊄ | おぎょうぎが わるいおとこの じょんくんだ |
| ㊅ | かいぞくだ さいこうつよい おとこだぜ |
| ㊆ | きらきらの はねがかわいい ていんかーべる |
| ㊇ | くらいなか ぴーたーばんは かつやくだ |
| ㊈ | けんをもつ ぴーたーばんは さいきょうだ |
| ㊉ | こどものまま おとなになんか なりたくない |
| ㊊ | さいこう ろんどんのいえに かえろうよ |
| ㊋ | しんじるよ ねばーらんどに つれてって |
| ㊌ | すすすすい そらをとんでる ぴーたーばん |
| ㊍ | せがたかい いちばんおおきい おねえさん |
| ㊎ | そらをとぶ ぴーたーばんは かつこいい |
| ㊏ | たいきんを ぬすみにいくぞ しゅっぱつだ |
| ㊐ | ちいさいな おとうとまいける かわいいな |
| ㊑ | よいなあ けんをもってる ぴーたーばん |

- ㊦いんかーべる まほうつかいで かわいいよ
 ㊧おいくに みんなでかえろう ろんどんへ
 ㊨んでかな つよくなったよ ぴーたーばん
 ㊩げるんだ ちくたくおとが きこえるぞ
 ㊪すまれた たいきんいっぱい かいぞくに
 ㊫ばーらんど ぴーたーばんが すんでいる
 ㊬りこむぞ ふっくのふねで たたかうぞ
 ㊭やくいこう ろんどんのみんな まっている
 ㊮ろいくに ねばーらんどは すてきだよ
 ㊯っくはね わにがにがてだ こわいなあ
 ㊰やにかけ ぴーたーばんが いえにいる
 ㊱しきれい いえにかえって みんなみよう
 ㊲いけるは いちばんちいさい おとこのこ
 ㊳んなでね ろんどんのおうち かえろうね
 ㊴らのひと たいきんぬすまれ こまってる
 ㊵がひかる ほしのひかりで かがやいた
 ㊶のやかね ふっくせんちょう ぬすんでる
 ㊷つつける ぴーたーばんを たおすんだ
 ㊸るしてくれ ぴーたーばんに やられたよ
 ㊹しいくぞ ぴーたーばんを やつつける
 ㊺くだなあ そらをとんでる とりみたい
 ㊻りんりん ていんかーべるの まほうのおと
 ㊼るると みんなでとんで たのしいな
 ㊽つつごー ねばーらんどへ しゅっぱつだ
 ㊾んどんに かえったらおとなに なっちゃうよ
 ㊿にだけは ふっくせんちょう にかてだよ

この取り札の文言を園児1人1人に振り分けて担当の札を決め、読み札と取り札を作らせるのである。なお、(こじか 2組)は、1組と同様にオペレッタ「ねずみのよめいり」よりジャンボかるたを作成し、かるた遊びを行っている。

4. 芥見第2幼稚園俳句活動の成果と課題

(1) 俳句活動による園児の生活の変容

本園の先生を対象に行ったアンケート調査をもとにして、俳句活動を行うことによって園児にどのような変容があったのかを述べる。

* アンケート調査

「俳句活動を行うことによって園児にどのような変容があったか」

- ・虫など生き物の俳句があると、園庭に出て「いないかな。」とさがす姿があった。
- ・「かたつむりそろそろのぼれ富士の山」という俳句から、「ふじのやまって、どんなふうかな？」と興味をもつ園児がいた。
- ・休み時間など、俳句に出てきた言葉やリズムで園児と会話を楽しむことができた。
- ・どんぐりが転がっているのを見て、「ねんねんころりしているよ～」とあそびの中に俳句の言葉があった。
- ・朝顔の添木に上る小さなかたつむりを見つけた。上っているかたつむりを見て、「かたつむりそろそろのぼれ富士の山」と俳句を詠み始めた。
- ・「さくら」や「かたつむり」などが絵本や制作に出てくると、反応する。
- ・生き物に命があることを思い、大切に作る姿が見られた。
- ・四季の移り変わりを目でも感じる事ができた。自然の変化に園児たちが気づき、旬のものであそぶことができた。例えば、どんぐりマラカス・松ぼっくりけん玉・お花のおままごと・落葉プールなどがある。
- ・いろいろな俳句を覚えることができた。
- ・オペレッタでは、俳句の音読の時と同じように、はきはきとリズムよく発声できるようになってきた。

(2) 俳句活動の成果

上記のような先生方のアンケート調査内容から考えると、本園が行ってきた俳句活動の成果は次の5点にまとめられる。また、これまでに「今月の俳句」として取り上げられてきた小林一茶の中から、特に各点に関連の深い例句をあげる。

* 俳句活動の成果と関連する俳句

- ① 俳句をリズムよく音読することで発音・発声が確かになる。
例句 「ゆさゆさと 春がゆくぞよ 野辺の草」
- ② 俳句の型を生かした言葉遊びをするようになる。
例句 「どんぐりの ねんねんころり ころりかな」
- ③ 俳句で覚えた言葉を生活場面で使うようになる。
例句 「雀の子 そこのけそこのけ お馬が通る」
- ④ 季語に親しむことで自然を感じるようになったり、動植物に親しむようになったりする。
例句 「かたつむり そろそろのぼれ 富士の山」
- ⑤ 俳句に出てくる日本の伝統的な行事や文化が園生活につながる。
例句 「おさなごや ただみつつでも 年のまめ」

(3) 教員が感じている課題

- ① 俳句に聞きなれない言葉が出てくると、どんなに説明しても園児に伝わらず、覚えにくさを感じる。
- ② 毎日の音読で、園児が俳句に親しむことはできるが、俳句をつくることはまだできない。

5. 三尺の童に俳句をさせることの意義と限界

芭蕉の言葉「俳諧（俳句）は三尺の童にさせよ」を聞いて、幼い子供に俳句をさせるとはなんと無謀なことかと捉えがちだが、本園の実践に触れるとさすがに芭蕉はよいことを言うと思いたくなる。本園の俳句活動から考えれば、三尺の童に俳句をさせることは可能だと言える。そればかりか、古典の言葉（俳句の言葉）を現代の言葉の獲得に生かすことの可能性を感じた。

本園の実践では、小林一茶の俳句を取り上げ、毎朝全園で一斉音読をすることが、みずみずしい言葉（季語）の獲得のみならず、本園での園児の生活やあそび、その他の活動の充実につながっているからである。園児の様子から考察すると、俳句によって言葉のリズムや型、自然やことからの認識のしかたを感じ取っていると見える。言い換えれば、日本の伝統的な言語文化である俳句の言葉の響きやリズムに親しむことが、保育における「言葉」の獲得に大きな効果を及ぼしているのだと感じる。また、それは「健康」「人間関係」「環境」「表現」などの保育内容すべてにかかわっていると感じられる。

しかし、本園の俳句活動は一茶の俳句に親しみ、それを生活に生かすというところまでである。俳句かるたをつくり、俳句かるたであそぶ活動につなげているが、それは現実的に先生の援助によるところが大きい。すると、就学前には俳句音読は可能で言葉の獲得に効果もあるが、そこまでが限界なのであろうか。就学前の子供には俳句で自己表現をさせることは無理があるのだろうか。こちらについては今後の研究課題としたい。

さて、小中学校では国語の授業の中で古典学習が行われている。この古典学習を難しい言葉の意味や文法から入るのではなく、両園のように日本の伝統的な言語文化にある言葉の響きやリズムに親しむことから始めると、現代の言葉の獲得に大きな効果を及ぼすのであろう。実は現行の学習指導要領もこのような立場をとっているのである。日本語の美しさは万葉集をはじめとする古語の財産の上に成り立っている。その代表的な要素として五七五のリズムがある。次世代の美しい日本語の担い手を育成する方途の一つとして、俳句に親しむ学習活動が大きな力を発揮するものと考えている。

注

- 1) 江戸前期の俳人。名は宗房。号は「はせを」と自署。別号、桃青・泊船堂・釣月軒・風羅坊など。伊賀上野に生まれ、藤堂良精の子良忠（俳号、蟬吟）の近習となり、俳諧に志した。一時京都にあり北

村季吟にも師事、のち江戸に下り水道工事などに従事したが、やがて深川の芭蕉庵に移り、談林の俳風を超えて俳諧に高い文芸性を賦与し、蕉風を創始する。その間各地を旅して多くの名句と紀行文を残し、難波の旅舎に没。句は「俳諧七部集」などに結集、主な紀行・日記に「野ざらし紀行」「笈の小文」「更科紀行」「奥の細道」「嗟峨日記」などがある。（1644～1694）

- 2) (さんぞうし) 俳論。服部士芳著。1702年（元禄15）成立。3部の論書「しろそうし」「あかさうし」「わすれ水」に、後人が一括してつけた題名。不易流行の論など、芭蕉晩年の俳句理念を説くところが大さい。
- 3) 最も採択数の多い、令和2年度版光村図書小学校「国語」では、3年上〔声に出して楽しもう 俳句を楽しもう〕の冒頭に「古池や蛙飛び込む水の音（松尾芭蕉）」を配している。
- 4) https://akutami.ac.jp/akutami_2nd/cat01/index01.php
- 5) 「学校法人 芥見学園 芥見第二幼稚園」岐阜県岐阜市加野3-1-7
- 6) 文部科学省 平成20年3月
- 7) 江戸後期の俳人。名は弥太郎、信之とも称。別号、俳諧寺。信濃柏原の人。15歳で江戸へ出、俳諧を二六（にろく）庵竹阿に学んだ。俗語・方言を使いこなし、不幸な経歴からにじみ出た主観的・個性的な句で著名。晩年は郷里で逆境のうちに没。「おらが春」「父の終焉日記」「七番日記」「我春集」など。（1763～1827）
- 8) 年長組（6歳児）の総称。2クラス（各20人在籍）あるので、こじか1組、こじか2組と呼んでいる。
- 9) 2022年（令和4年7月）西田拓郎の質問事項をもとに園長が全職員を対象に実施。